

プロローグ

生まれつき盗賊な者などいない。だが、盗賊になるしかない者はいる。生まれながらの境遇、社会への反抗心、そして、盗賊としての天分の才。すべてを兼ね備えていた君は、ほとんど何の疑問もなく盗賊として生きてきた。優秀なのは確かだが、ここネグラレーナ市には来たばかり。第二の人生をスタートさせつつある新参者だ。腕はあっても不案内なのだ。

ネグラレーナの【奇妙な猫の瞳】亭は、ネグラレーナ市でもまあ大きな宿屋である。宿屋の主人アレハンドロは、その飼ひ猫である【高貴なエストレージャ】の互い違いの瞳（右目がルビーのように赤く、左目が深い海のように青い）に恋し、自分の宿の名前にも互い違いの猫の瞳を表す名前をつけようとした。ところがどうだ、互い違いを「奇妙な」などと表現したがために、猫そのものが奇妙なようにも取られるし、正しく読み取ってもらっても「奇妙な瞳」という、エストレージャ様にとってはたいへん不名誉な宿の名前となってしまった。

こんな【奇妙な猫の瞳】亭だが、街の人々の知らない夜の顔がある。ネグラレーナには盗賊ギルドが存在し、盗賊の仕事を手けている。ギルドメンバー（通常はギルメンと呼ばれる）は拠点としている宿屋ごとにチームに分かれている。ここ【奇妙な猫の瞳】亭はもっとも大きなチーム

である「夜の猫」が拠点としている場所なのだ。

生き方の結果として、あるいは代償として、君はこの世界で生きてきた。何も後悔はないし、二度人生があったとしても、この生き方をもう一度選ぶだろう。夜の匂い。ギリギリのスリル。隠された秘密を自分だけが知る、その瞬間。そして、金。人を手玉に取り、強烈な稼ぎをあげたとき、自分は最高の存在なのだと思える。

ネグラレーナは自由な都市だ。二ナの言うとおりで。懐かしいエルフの盗賊の顔を思い出す。行くあてを失った君を、この古くて新しい街に招いてくれた女エルフ。

「この街はきつと、あなたにびつたりよ」

そう言って笑う、ほころんだ彼女の顔を思い出す。来たばかりの頃は、旧市街の黒っぽい壁の家と、対照的に真っ白な新しい街並みに少し驚いた。だが今は、その様もこの街にふさわしく思える。光と闇の混ざり合う、このネグラレーナに。